

福井大学学術協定校への派遣留学（交換留学）月例報告書（7月分）

留学先大学：Vytautas Magnus University

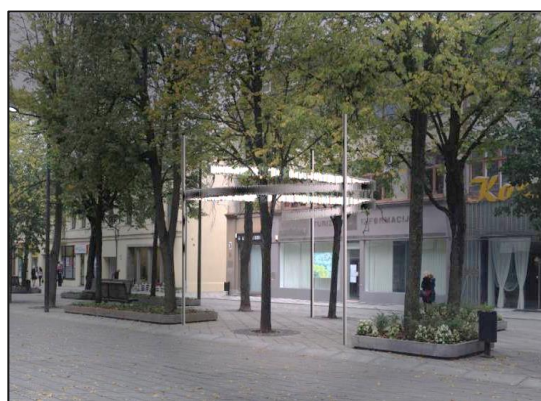
氏名：金子 のの子

Geras oras! (いい天気ですね!) 7月-Liepa-です。ここカウナスにも本格的な夏が来ました～! 寮の部屋にはクーラーがないので凍らしたペットボトルで暑さをしのいでいます。日本では、異常な暑さが続いているようですね...。今月の報告書では、前回の続きということで杉原記念館のインターンシップの内容を紹介します。それでは、7月の報告書ははじめます!

【もうひとりの立役者】

ヤン・ツバルテンディクという人物を知っていますか? 彼は、杉原さんのビザ発給に関わる重要な人物のひとりです。残念ながら、日本人の間ではほとんど知られていません。ぜひ杉原千畝さんと一緒に覚えてください。

当時、ナチス・ドイツの手からユダヤ人が逃れるために残されていた手段は、日本を通過し第三国へ出国することでした。そして、日本の通過ビザを取得するには受入国のビザが必要だったのです。そこで、オランダ名誉領事だったヤン・ツバルテンディクが「キュラソー・ビザ」を発給することを決断します。カリブ海に位置し、オランダの植民地であったキュラソー島は税関なしで入国することが可能であり、名目上の最終目的地として適した場所でした。彼が発給した受入国のビザを手にしたユダヤ人が次に向かったのが、杉原千畝の日本領事館だったのです。



彼も杉原さんと同様に、イスラエル政府から諸国民の中の正義の人として表彰されています。国や立場が違っていても、ヤン・ツバルテンディクと杉原千畝は「この人たちをどうにか助けなければならない」という同じ意志をもってビザ発給の決断をしたのでしょう。杉原さんのビザの物語が世界で知られるようになって、彼の功績を再評価する動きが少しずつ進んでいます。カウナスのLaisvės通りには今年の6月にできたばかりの彼のメモリアルがあるので、記念館に来た際にぜひ立ち寄ってみてください。

【インターンシップの内容】

杉原ハウスの訪問者の約8割は、日本人の方です。ツアーグループが多く、5月から9月の忙しい時期だと1日で平均的に6グループが来て、団体プラス個人の数を含めるとだいたい1日160人くらいの方が訪れています。

インターンの内容としては、チケットやお土産の対応、ビデオルームのセッティングなどをします。グループ団体はスケジュールの都合で滞在時間が短いため、館内の展示の説明はせずにお土産の対応をすることが多いです。ツアーの人たちが大量にお土産を買うので、どんどんお土産のバリエーションが増えてきています。チョコレートやはちみつ、シャコティス(リトアニアの伝統的なお菓子)、ポストカード、マグネット、ピンバッジ、リネン製品などさまざまです。「カード使えますか?」とよく聞かれるのですが、現金(ユーロ・日本円)しか使えないので、クレジットカードの利用を考えてその点は改善する必要があると感じます。



個人で来られた方には、積極的に声をかけて展示パネルや資料を使いながら説明するようにしています。当時のリトアニアの状況からはじまり、ヤン・ツバルテンディクさんのこと、杉原さんのビザ発給の経緯、外務省との電報でのやりとり、シベリア鉄道や船の旅路、そして福井の敦賀港でのユダヤ人と現地の人との物語などを、紹介していきます。物事を羅列しながら話すと伝わりづらいので、ところどころストーリーを織り交ぜながら説明するように心がけています。やはり初めは、たくさんの重要な事柄をいかにわかりやすく、こぼさずにまとめて話すかということが難しく感じ、聞いてくださる方の目を見ながら説明するのにも緊張していました。それがだんだんと慣れてくると、訪問してくださった方に「ここに来てよかった」と思ってもらえるように伝えていきたいと思うようになりました。本やガイドブックに載っていない、ここだからこそ知ることができる物語を知って帰って欲しい。“ずっと来たかった場所にやっと来ることができた”という思いを持っている人たちにしっかり応えられるように頑張っていきたいです。

【杉原ハウスで出会った人々】

杉原ハウスでインターンをしていると、たくさんの人たちと出会います。バルト三国に旅行に来た人や日本人留学生、英語の先生、世界一周している人など、本当にさまざまです。中でも印象的だったのは、60代の日本人ご夫婦との出会いでした。お二人の旅にはテーマがありました。それは、第二次世界大戦時のナチスによる Holocaust を受けて“なぜ人はあんな残酷なことができたのだろうか”という問いと、実際にその地を訪れ、人として知っておかなければならない出来事に目を向けることです。50代60代になってそういう思いが強くなったと仰っていたのも印象的でした。柔らかな物腰で笑顔がやさしく、でもどこか芯の強さを感じさせるご夫婦の姿がとっても素敵で、お二人と話すことで、杉原千畝記念館で働くことやテーマを決めて旅をするということについて改めて考えさせられたような気がします。

◆次回は、夏休みの旅行編をお届けします！